

4、近藤鉄城 「上福岡移転の大構想」

日時 一九八二年一〇月六日

場所 川越市小仙波町5-417 光西寺

開き手 田中菊次郎（百年史編纂室） 小野沢主計（百周年事業事務局次長） 鈴木俊光（同主任）

近藤鉄城氏略歴

一九〇六（明治39）年12月15日生まれ、本籍・茨城県結城町大字結城四四四、渡辺勝二（以上学籍簿による）

一九三〇（昭和5）年3月25日 東洋大学大学部支那哲学東洋文学科卒

一九四四（昭和19）年 東洋大学学生課長

（一九四五年1月応召）

一九四七（昭和22）年 東洋大学復興課長

一九四八（昭和23）年3月 東洋大学再建事務局委員

同年11月 辞任

近藤家訪問は午後一時からということであったが、近藤氏は午前十一時からと聞かれていたようで、午後二時から法事があり、会談時間は大幅に短縮された。近藤氏は右眼が白内障で、ほとんど見えないとのこと、また心不全の気があるといわれたが、すこぶる元気な様子だった。なお近藤さんは中国・大同のオルドス砂漠で見つけたという西夏文学の原典を研究し、龍谷大や京大の専門家へ報告しておられた。

（近藤氏はその後、聞き書き原稿に手を入られたが、一九八二年一月一五日急逝された。七十五歳。ご冥福を祈ります。）

——東洋大学八十年史に上福岡移転問題が書かれていますが、これがもう一つはつきりしませんので、そういうことを中心に、戦後の大学復興課長時代のお話をおうかがいしたい。

近藤 この前、八十周年のときでしたか、成石義之がやはり戦後の様子を聞きたいということで、うちへ来ました。八十年史は送ってこなかったし、大学の埼玉県校友会支部からも何の連絡もありませんでした。成石とは福岡の話をしました。（と八十年史をとって開く）少し読んでみます。……大体わかります。

——相当くわしく書かれてはいるんですが……

星野組の問題

近藤 戦後、昭和二十二年春ころ、私が大学に關係して上福岡移転という問題になったのですが、その前に星

野組が問題を起こしていました。大学は戦災で講堂やら何やらひどく被災していました。その修理工事に不正があるというので、私は清水建設の常務が知り合いなので検査させた。当時は大学へ三沢元貫も出ており、成石義之も出ていて、私にもどうしても大学へ出るということで顔を出したのですが、星野組に百五十万払わなくてはならないという話です。これはどうしてもおかしいので、全部検査したのです。岸法律事務所（水道橋）の左生弁護士に話をして訴訟問題になり、とうとうあまり払わなくてすみしました。大学には事実、金はなかったのですが……。

上福岡移転の大構想

つぎに上福岡移転問題ですが、大学は当時どうにも狭くてしょうがない。二十一年か二十二年ですが、上福岡に火工廠の二十万坪の土地があった。ここへ移転できればと考えたのです。二十万坪といいましたが、実際は十五万坪でした。それも中学校に五千坪渡すので、差引き十四万五千坪が大学の敷地にできるのです。これは三沢の家に疎開していた、名前を出しているのか悪いのか、伊原隆さんという大蔵省理財局長、この人を通して県の管理事務所の渡辺さんに払下げの話がきました。競願者もありましたが、結果的には、場合によればよろしいというので、設計を出しました。成石君と私で設計したのです。青写真はうちのどこに残っていますが、現在の学部は全部あり、ないのは薬学、農学、医学部だけの大きな構想でした。大蔵省でその設計はOKになりました。そこで二十二年に川越市長伊藤泰吉さんに頼んで、関係六十四の市町村長に川越会館に集まってもらい、鮎川義介さんに出席してもらって、すべてよろしいというので調印をとりました。鮎川さんもやりましょうというこ

とになりました。

当時は物資のないときでしたので、私は市長に頼んで、町村長にご馳走を出すようにはからいました。また日清紡の末延人事部長——私と軍隊がいつしよで、衆議院議員選挙に初めて出ましたが、怪我をして落選しました——その人に話して、白布一反部ずつ参加者全員に配りました。

とにかく六十四市町村長が全部、判を押してくれました。私たちはそれをもって埼玉県のアメリカ軍司政官ライアン中佐に提出しました。同行したのは学生課長の小沢文四郎教授（のち立正大学）と英語の加藤猛夫先生だったか、私と合わせて三人です。ところがライアン中佐がどうもわからないんです。まず東洋という名前に反感を感じたようです。それに翠光会という団体が——白戸としえとか、川越の榎本園子とか——、同じ地域に「婦人の街」を計画して、払い下げを申請していました。これは七万坪でしたが、後には一万坪ほどに縮小されて、あとを東洋大学に、ということでした。この当時の火工廠には、弾薬や兵器がまだどっさりあるので、弾薬などは東洋大学側が責任をもって移動してくれ、ということでした。

十五万坪千五百万円

上福岡の土地の大蔵省への支払いは、十五万坪千五百万円、二十年年賦という条件だと聞いて、それならばすばらしい条件ですから、私はこれでいいと判断しました。

しかしながら、大学では意見が二つに分かれました。いま思いますと、私たちのものの考え方が三、四年早かったのです。他の大学もその後四、五年経つと、その趨勢に迫られてきて、そうになりました。東京から郊外へ移転

しようという構想に気付いたようでした。私は大蔵省の条件は実現可能だと思いました。藤原猶雪学長時代でしたが、その時、会計上の問題があつて、結局私が会計を兼務して、黒字が十六万残りしました。大学の黒字が一年でこれだけになったのは、初めてのことでした。それを考えて、上福岡の条件は「可能」としたのです。千五百万を二十力年ですから。

ところが大学内部では、教授たちが反対です。当時、川越は田舎です。移動に時間がかかつて講義に差し支えるというのです。学生もまた反対です。学生は東京に大学があることに魅力を感じていたので、田舎落ちするといふのです。私と成石は、学生たちと講堂で移転問題について討論しました。小泉という埼玉からきている学生が、私は川越の人間だけれど、上福岡へいってもサツマイモだけしかないと反対しました。買出しの時代です。私は壇上から学生に向かつて、サツマイモでも簡単に手に入つて食えるだけでよいではないか、と反論しましたが、そんな時代だったのです。それに校友も高野剛や二之宮英雄らの一派が反対していました。反対していたのか、学生をあおっていました。高野剛は不正入学なんかでクビにされていたのです。こうして、校友も教授も学生も、内部で意見が分かれていました。それでうやむやになりました。そのあと加藤虎之亮学長となりましたが、話はまだ続いていたのです。大蔵省には、立教大学が上福岡移転の申請を持ちこんできましたが、東洋大学との約束があるからと、渡さなかつたそうです。翠光会の「婦人の街」は実現しませんでした。だから、その時点でも、まだ東洋大学は間に合つていたのです。

川越の土地買収

話とはびとびになります。京都の青蓮院にいた坂戸公隆が埼玉に帰って、昭和三十年東洋大に出て理事になりましたが、その坂戸が上福岡の問題を持ち出し、現地と直接交渉をしたようでしたが、前の経過を知悉せず、地元では私に相談しなかったということで蹴ったのです。まだ伊藤市長もあり、私と市長に相談すればよかったのです。そういうことで上福岡移転が消えて、川越の敷地を四、五年後、いやもう少し経っていますか、買ったのです。七千万円でした。

川越の土地買収を実質的にやったのは、満州の孫呉時代の私の部下で、私が部隊をもっていたときの事務室の下士官だった根生貞次郎で、市の商工課長をしていました。それに名細の田村孝左衛門が代役をやっていました。その田村にいつけて、根生は商工課長の立場でとりしきり、工学部の土地ができたのです。工学部の土地を買う前にどうして私のところへこなかったか、大学から全然話がありませんでした。坂戸のあとの埼玉県校友会支部長が私ですから、二人は懇意なのに、どうして坂戸が私のところにこなかったのか、疑問に思いました。私は三沢や成石に対しても、どうも考えが違う、意見が合わなかったもので、昭和二十三年十一月にポツとやめました。こっち（上福岡）に移転してくれば、ずいぶん便利だったのです。東京からも近いし、駅を降りて五分くらいのところで、道路の舗装もしてあるし、水道はある。少しくらいなら教室にできる建物もたくさんある。学生の宿舎になる建物もザラにあったのです。それがとうとう実現しませんでした。大学内部が一致しないので駄目でした。教授の中では西義雄先生をはじめ反対でした。私の知っている毛塚栄五郎、平野宣紀ら校友も反対している。あとでどういっているかわかりませんが……。

小沢さんと私は泣いたです。せっかく努力してやったのに、あまり尠大な計画なので大学はびつくりしたのかもしれません。それだけ多くの学部をつくるというのは、一つの案だから、土地を貰うための案なのだから、できないときは、できなくてもいいんですよ。いまでも残念です。

上福岡の土地は川越の五分の一の値段で、十四万五千坪あれば、あとで朝霞を買ったが、その必要もないくらいです。上福岡の話はそのままで、大学はそのうち川越を買いました。川越を買う前に、私にどうしてひとこともいかなかったか。伊藤市長はどっちでもよいんですからね。上福岡は隣だけれど他の市ですからね。自分の市に大学がきてくれるのは結構だが、伊藤さんと会うと、どうして先の話を実現させなかったのかといわれました。私は藤原学長を擁護していました。藤原さんは会計課のだからが不始末をしたということで、藤原さんを責めますけれど、学長は学者なのだからそんなことは知らないんだ、とんでもないことだと三沢と喧嘩しました。私は何も大学にいらなくてもよい。星野の問題も解決したし、上福岡は君たちでやればよいのだからと、私はやめたのです。ほんととは実現できるかなと思っていました。

それから十年ほど経って、立教が上福岡の土地を欲しいといってきました。そのときでもまだ東洋大学は先口（せんくち）でした。理財局長伊原さんもライアンもいいといったのです。婦人の街をつくるという翠光会という団体はじめは土地の半分、七万坪を欲しいといったのが、それが一万坪となったのです。私は一万坪くらいなら「やっていいのではないか」といいましたが、成石は反対しました。火工廠は塀がありました、塀の外は畑で、坪単価もごく安い。いまは五十万か百万といっていますがね。とにかくただみたいな地価でした。だから、それは

それで確保してしまえ、大蔵省だからできるんで、取りあげた土地ですからね（註・旧軍用地の払下げ）。普通ならできっこないんですよ。地元も熱心でした。

考えてみれば、三沢は死んだし、成石も死んだ、彼は大陸かぶれしちゃってね。そのあと満州から愛沢恒雄、柳井幸太郎が大学へきました。私は孫呉で部隊をもっていた、成石も孫呉で庶務課長をしていました。あれも頭陀袋一つで引揚げてきたんです。

——愛沢さんは昭和二十二年に大学に戻っていますが……

近藤 上福岡の問題のときは愛沢はいません。私がやめてからです。星野組の問題ですが、大学の戦災修理費が百五十万円残っていると請求されていましたが、どうもつながりがよくわからない、左生さんと松前さんという二人の弁護士に依頼して整理しました。訴訟の結果おそらく三十万も払っていないでしょう。星野組に手を引きました。借金の抵当の理事でしょう。だいたい、業者が理事をやるのはおかしいと私はいました。食いものにしていました。清水組の検査によると、修理費の合計と請求をみると、すっかり払ってしまっている。それを請求されていたのです。理事会か何かで決まっていたのでしょうか。三沢がいると、もつとはつきりするでしょうが。

——上福岡移転に反対というのは、白山が離れないという空気もあったと思われませんが……

近藤 いや、教員は兼任者が多いのです。当時、とっても交通難でしょう。東上線は買い出し電車で、窓から乗客が出入りするという状況で、どうしても通勤の時間がもてないのです。当時は上福岡まで池袋から五

十分かかり、それも遅れがちでした。学生は大学が東京にあることに魅力をもってきているのに、田舎落ちでは困るという。それに資金の面が大学はどうにもならなかった。いまは学生の数が多いから何でもないでしょうがね。また文部省の私学振興もできていなかったのです。しかし、先にいました十六万円の年間黒字でしょう、二十年年賦千五百万円なら、何でもないと思いました。

当時のことを知っているのは米山智護くらいでしょう。私と同級生です。米山のおやじは、大学はえらい財産を棒にふつたとよくいったものです。当時は給与が悪くてね。土屋光治を私は引っぱってきて図書館に入れたが、やはり農業高校に入れ直しました。毛塚栄五郎先生も大学の俸給が少ないので、私がある私立高校の時間講師を頼みました。

川越買収に陰の力

——工学部の川越校地の話に移りますが、あれを入手するとき、近藤先生が陰で動いて下さったと聞きますが……

近藤 それだけの話ですよ。大学は私のところへ話はなかったが、（上福岡問題で）大学側でも私にはいいづらいだろうから、市にはやってくれよと動きまして、結局商工課長——私の軍隊時代の部下——が裏で全部まとめてくれました。表に立てたのは田村孝左衛門という元村長さんでした。私は表に立たない。落成式には行きましたかね。田村さんはその後、大学の嘱託になりました。

——先生の兵役はどうでしたか。

近藤 蘆溝橋事件が始まって召集で山西省大同に行き、十五年の暮に帰還して先生になりましたが、十六年六月にまた召集で満州の孫呉で部隊をもちました。大尉です。十八年までいました。帰還すると高島米峰さんに引っぱり出されて学生課長をしました。坂本幸男教授（仏教学）が幹事長で、わが家にきて懇請されました。二十年一月また召集があつて藤沢で情報将校を努めました。

——終戦後また大学にもどられますね。

近藤 大学は人がいなくて困っていました。三沢が頼んできました、復興課長になったのです。私が入ってきたときは藤原猶雪学長でした。

——そうすると、先生のこられたのは二十一年の夏ころでしょうか。橋本増吉学長が二十一年五月にやめられ、九月に藤原学長となります。

近藤 そうですか。とにかく上福岡の問題は大学に積極性がなかったということです。むしろ地元の方が熱心でした。市長、町村長はどうしたんですかと私の方にいつてきました。大学内部がまとまらないから、どうしようもないのです。

——八十年史には、この問題は途中で行きづまったまま終ったと書いています。

近藤 八十周年の前に、成石が私のうちに来たとき、この問題について話しました。ずいぶん長い時間しゃべった。このことについて川越にきたのは成石だけですから、それはおそらく成石が書いたのです。

成石は途中で気が変わったのではないかと思われます。小沢文四郎先生（支那学）も間もなくやめました。こ

の二人と私と三人で埼玉軍政部へ行きました。「婦人の街」については、アメリカは婦人のことに関して弱いです。東洋大学についてはライアン司令官は、東洋という言葉が軍国主義的、保守的イメージが強く、あまり好意をもっていませんでした。もう何度か熱心に押せば成立したでしょう。小沢さんの話では大体ライアンはOKしていました。

八十年史の記録にある移転後の経営に関する科学的資料というのは、運営計画を出しました。八十年史にワルツ大尉というのは軍政部の教育部の関係の人で、ライアンの下にいました。財務局浦和支部はみな承知していましたが、当時の大学の財政は、外国人が信頼するに足るほどの余裕がなかったことは確かです。わずか十六万の黒字で目の色変えた時代ですからね。東興紡績（上福岡の火工廠跡を大学と翠光会と東興紡績で三分割の案があった）の話も消えてしまいました。ここに愛沢がやっているというが、私は二十三年には、まだいたのですから何か感違いしている。成石の文章ですが……

——伊藤市長はどういう人でしたか。

近藤 市長を四期勤め、在任中に亡くなりましたが、もと朝鮮の警視庁官のような役をした人で、いい人でしたよ。なんとか大学をもつてきょうという気があった。大学側が日を経るに従って……三沢はそこところ……三沢はいつまで大学にいましたかね。

藤原さん時代の会計上の問題というのは昭和二十二年です。思い出しました。会計課長は志村賢樹で、そのあとを私が臨時にちょっとやりました。当時の学長はたいへんですよ。私は三沢と学長の進退問題で正面衝突しま

した。私がやめたのは二十三年十一月。私がやめるまで三沢はいました。そのいきさつを知っているのは図書館の岩本末子さんです。相談していたその席にいて、お茶を出したりしてくれていました。和田吉人先生も多少ご存じでしょう。

——三沢学監は移転に反対だったのですか。

近藤 三沢は反対ではないが、甲州人ですからね。金の計算で二の足踏んだのではないかと思います。私は校友に号令をかければ、金くらいなんとかなるという考えです。埼玉の連中に話したら、みな大丈夫ですというこ
とでやっていました。

——上福岡の話がまだ生きているのに、どうして川越の話になったのですか。

近藤 それは、坂戸公隆が川越高校の先生をしていた過去があるんです。坂戸が上福岡へ最初にいつています
が、教え子に共産党議員がいて、それに話している。そういう人にいつたつて駄目ですよ。川越市長は私こそ大
丈夫だと私を信頼していました。私が全部とりしきつてやっていましたからね。

私が大学をやめる原因はもう一つ。市町村長に集まってもらつて、引き出ものとして日清紡の白布を六十何人
に贈つたが、その代金三万円、いや三千円だったかな、それを私が立て替えていた。三沢らはそれを無断で使つ
たということです。これは多分自腹を切つた。それで憤慨しました。いろんなことを人に頼んでおいて何事だ。三
沢も成石もその席に出たんです。川越会館、いま市民会館ですが、そこに市町村長が一人の欠席もなく集まつて
くれたのです。それを後になって、報告書を出した時点で知らない、近藤が勝手に使つたということです。

上福岡と白山の問題もありました。私は白山を売る必要はない。本部だけ白山において学部はこちらに移せばよいというのですが、成石は白山を三千万円で売ればよいという考えでした。私は反対しました。

——大蔵省が白山を買いにきた、京北もいっしょに買えればいいんだが、といったことですが。

近藤 京北は別の財団ですからね、それは駄目でしょう。

——戦争中に学生課長をしていられますが、当時大学にはほかにどういう課がありましたか。

近藤 庶務と会計、そんなことです。学監はなかった。幹事長がありました。坂本幸男さんが幹事長で、事務局長というか、学長の下で一切をとりしきっていました。幹事というのは聞きません。制度ははなだ不十分でした。

——橘高倫一先生が幹事長になられたのは坂本さんのあとでしたか。

近藤 そうそう、まあいろんなことがありました。昭和二十八年でしたか、高校の先生をやりながら大学の再教育をうけました。それで一級免許状をもらったでしょ。埼玉県教育委員会では問題になりました。私は一月に四日くらい大学へ行き、あとはレポートでした。卒論は書かされました。西義雄先生に笑われました。

——近藤さんは大学に入られるのは何年ころですか。

近藤 農業学校を出てから二年後です。東京の従兄の家にきて他の高等学校に入りましたが、軍事教練反対運動でやめさせられて、それから東洋へきました。大正十四年から十五年でした。

——近藤さんの在学当時の学生生活や、復興課長時代の苦心など聞きたかったのですが、時間が一時間しかあ

りませんでしたので、機会があればまた改めてうかがいます。